公益社団法人千葉県隊友会　令和8年9月号（2026.9.26）

館山支部だより　Vol.136

＜支部連絡窓口＞
千葉県隊友会館山支部
事務局(代表) 川 村　巌
〒294-0032 館山市笠名1357
℡ 0470-22-0230

“今年一番危険な台風”というフレーズで関東地方を襲った台風25号は各地に深刻な冠・浸水被害を残しました。 このところ“線状降水帯”がすっかり“日常”になった感があります。
大惨事を引き起こしたネパール・中国国境の氷河の崩壊は、地球温暖化による気候の変動に起因するものと考えられております。 ネパール首相が、温暖化の主因ともいえる化石燃料消費大国の米国などを名指しで非難し賠償を求めております。 かつて国連の事務総長が地球の温暖化を“沸騰化”として世界に警告を与えております。地球上の気候変動がここまで深刻化した現在、何はともあれ先ずは大国が動かないと・大国を動かさないと問題解決にはならないと思うのです。国連総会で解決への抜本策が示されることを期待したいものです。　≪川村 記≫

支部の活動概要

≪8・9月の活動実績≫
9.26(土) 9月支部役員会(コミセン)

11.28(土) 11月支部役員会(コミセン)

≪10・11月の活動予定≫
10. 7(水) 館山航空基地殉職隊員追悼式(基地)
10.10(土) 館砲校予備学生戦没者慰霊祭(安房神社)
11. 5(木) 館山航空基地開隊懇親会(市内)
11. 6(金) 館山航空基地開隊記念式典(基地)

参考情報　南方諸島方面戦没者遺骨収集事業について

毎年、政府(厚労省)主管の南方諸島方面の戦没者収集事業が行われております。一例として
＜令和8年度ソロモン諸島遺骨収集、第2次現地調査派遣＞・・隊友会本部からの情報
期　間 ； 11/25～12/9　　場 所； ソロモン諸島ガダルカナル州
派遣人員； 5～6名　隊友会、日本遺族会、全国ソロモン会ほか
このほか硫黄島、東部ニューギニア諸島の遺骨収集、現地調査も毎年続けられておりますが、参加人数の制限や健康状態(健康診断書)、パスポート申請の準備も必要、 また申込までの期間の余裕があまりない場合もありますので、あらかじめ情報を把握の上、参加希望者として事前に登録して置くのが無難かと思います。戦後81年、今なお帰国を待ち侘びるご遺骨の一日も早い故国への帰還を願って止みません。
奉仕事業について志ある方々のご賛同をお願いするものです。
連絡・問合せ先;館山支部事務局　メールアドレス g_navy@outlook.jp　　《支部事務局》

レクイエム

9/11　佐野　連一会員ご逝去(空、享年89歳)

隊友会館山支部会員として長年のご理解ご協力ありがとうございました。
会員一同 衷心からご冥福をお祈り申し上げます。合 掌



《鷹の島・旧海軍館山基地の燃料タンク区画》
覆土式、1400KL、平成11年頃まで海自も使用





《赤山・タンク底部の水平坑道》
送油ポンプ・配管区画と考えられる。
現在入口はブロックで閉鎖中

随 想：“日進月歩改め分進時歩”のAIの進歩

以前にも述べたことがありますが、ここ数年のAIの進歩は、“長足”とか“日進月歩”という表現では不十分、”分進時歩”と言うべきか。各種の自動運転、医療、創薬等々の分野ですでに実用化の段階に入っているものが多々あります。 我々に身近な防衛の分野でも無人偵察機、無人攻撃機、爆撃照準器等々、AIが敵味方や敵情を判断し目標や発動時機を正確に指示してくれるとか。

“AIの功罪”について見方はいろいろあるようです。「日本の雇用1000万人が(AIによって)代替えされるリスク」という指摘は、AIの活用によって1000万人が職を失うことを意味したものです。失業者に限らず AIへの変換により“翻訳業の損益20%”と言った結果も出ているのです。 中国が盛んに宣伝している人間ロボット選手による“オリンピック競技”、100メートル短距離走で10．2秒達成とか、ボクシングやレスリング競技等々、これらはショー・見世物としてではなく、近い将来AIが人間に代わって多くの分野で活躍できること、その技術力・ノウハウを中国が開発していることを世界に誇示・アピールしようとする意図なのでしょう。

*ごく最近(今夏)、「AIの進歩に歯止め・ブレーキをかけるべし」という声が相次いで出されています。*この道で有名なイーロン・マスク氏もその一人です。詳しいことは分かりませんが、「技術的、構造的に暴走の危機・リスクを残している」、「政治・法制が追い付けない」ことに対する警告のようです。ごく最近、オープンAIが勝手に外部システムにアクセスし、勝手にサイバー攻撃を仕掛ける、というSFもどきの話が現実の脅威になっているのです。 “AIに使われない、浦島太郎にならない”ためにももっと勉強しなければと思ってます。
《匿名希望高齢会員、海》

巨大な燃料タンク工事跡(赤山)の再検証

赤山には地下壕と背中合わせに“航空機用燃料タンク工事跡”と見られる2箇所の大きな竪穴が残っている。
現在、赤山は樹木が密生しタンク底部の水平坑道も民家の敷地内にあるため、人目に触れることも話題にのぼることもなく、遅かれ早かれ歴史から消滅してしまう運命をたどることであろう。 巷間では、海軍の航空ガソリンタンクとして戦争末期に工事が始められ、未完成の状態で終戦を迎えたという説が有力なようで、一方赤山地下壕については戦前から海軍の専門工作部隊の手で秘かに工事が進められていた、というもっともらしい話が伝えられている。この燃料タンク工事跡については10年ほど前に紹介したことがあるが、その後見付かった資料(防衛研究所保管)から、この燃料タンク工事跡の経緯等について再検証してみることにする。

海軍の航空燃料備蓄・タンク建造計画について

昭和10年ころから海軍は日米開戦を想定し航空ガソリンの備蓄に本腰を入れ始めた。 作戦構想として、開戦2年間は備蓄燃料(50万KL計画)で持ち応え、以降は南方占領地の燃料取得に期待する計画で、昭和10年頃から燃料備蓄タンクの建造に拍車をかけた。 最初は佐世保地区に集中的に整備(38万KL)し、昭和13年以降は横須賀地区(箱崎・吾妻島)に集中的に計画・建造を進めている。航空燃料タンクはすべて「50KL覆土式タンク」であった。 赤山の2箇所のタンクもS13年以降の建造計画の一環として計画されたものと考えられる。

赤山燃料タンクについては、次の2点から日米開戦直前のS16年に着工したと見るのが順当であろう。
・S16年の館山航空基地一般図(施設図)の中に、2箇所航揮油槽(※)が記入されている。 (※海軍では航空ガソリンのことを「航空揮発油“航揮”」と呼んでいた。)
・S15．3の軍需部(館山支庫)施設図に、赤山下の十字路(旧大黒屋商店前)から赤山に至る区域が軍需部への管理替予定地として示されている。 ⇒工事廃土の運搬(トロッコ)・赤山～岸壁間の給油菅設置スペースとして必要不可欠

なぜ終戦まで完成できなかったのだろうか？

当時、5000KLタンクの建造工事は2年半から3年を要すると言われている。戦前(S16年)に着工してなぜ完成しなかったのであろうか、という疑問が残るのは当然である。
日米開戦とともに南方方面の航空作戦は予想を大きく上回る展開となり、1年もたたない中に備蓄燃料を使い果たす状況であったが、一方南方占領地の燃料確保が予想外に順調に進展し、S17年半ば以降の本土への燃料輸送は期待・予想を大きく上回ったと言われる。しかしながら予想外に早く 始まった米軍の本格的な反攻、活発化した米潜の暗躍により本土への油の輸送が大きく滞り始めた。このような状況に鑑みてS18年に入り海軍航空本部から航空機用備蓄燃料タンクの“建造中止”が下令された。工事途上の館山の“航揮油槽”も例外ではなかった。
最後に赤山の燃料タンク(工事跡)は2基で容量は10、000KL、これは館山航空隊のものではなく、軍需部所管の備蓄燃料タンクとして計画されたものである。なぜこの館山に備蓄用タンク2基が計画されたのだろうか、素朴な疑問が残る。目下研究中であるが、房総半島の先端は日本の最南端に位置している。この地理的な優位性から近海行動中の空母等への緊急給油を考えたものなのだろうか。　　《自称館山地域史探索マニア その58》